
からくり卍ばーすと

愛福

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

からくり卍ばーすと

【Nコード】

N0966Z

【作者名】

愛福

【あらすじ】

からくり卍ばーすとを個人的に解釈したものです。全体に話が暗いです。完全に神曲汚し。戦闘シーンとかあったりします。

俺の嫁がこんなに暗いはずがねえええええという方はクリックしないでね

(前書き)

自己解釈まみれだよ

それでもいいって強者の方はスクロールしてください。

その国は、進みすぎたのです。
理想を、求めすぎたのです。

他国がなしないことを次々とやり遂げて、やり遂げて、やり遂げすぎて……。

異常おかしくなったのです。

『国の発達のためには優秀な人材が必要だ。』

まだまだ他の国が王様ひたますの下に跪ひたますいているときに、その国の人々はおもいました。

それから、優秀な人材のみを選びすぐり人体実験を重ね、ついに究極へとたどり着いたのです。

必要なのは、能力の高い人間。能力が足りない人間は、普通の人として、普通に笑って暮らせる国でした。

しかし、そんな国の体制に不満を持つとても能力の高い人間がいたのです。

ある時、革命クーデターがおき、国のあり方変えようとしたひとがいたのです。

多くの血が流れ、多くの人が死にました。

しかし、あまりに賢すぎて、民衆がついて行けず、結局体制は変わらず、革命は失敗に終わりました。

唯一変わったこと……。それは、『完璧すぎる者は、不穏分子になる。』という認識が民衆に広まったことだけでした。

あるところで、愛らしい双子がすくすくと育っていきました。

「リン！明日で人生決まるけど、どうする〜？」

「レンには負けないんだから〜」

6歳の双子は、能力検査を明日に控え、互いの能力を比べていた。武術ではわずかにリンが、勉強ではわずかにレンが勝っていたが、二人の能力は類を見ないほど総合して高かった。

しかし、その幸せは、能力が高すぎたために、二つに、裂けた

R i n

「お前は、不穏分子だ。」

「そんな………。私だけ、不穏分子！？レンより3倍高いだけじゃない！」

「仕方ないだろう。お前の人生はもう、決まった。さあ、来い。」

「いやっ！！レンに！最後までもいいから一回だけでも、レンに会わせて！」

「だめだ。お前は危険分子として処分される。」

そして、連れて行かれた先は収容所^{おとこいしやうじょ}。

白衣を着た女が目の前でニヤリ、と笑っていた。

「わたしはミク。あなたの担当。能力が足りなければ殺す。強くなければ死ぬ。以上。」

その日からリンの、血を吐くような「任務」が始まった。

L e n

完璧に、気まぐれに殺しを実行する。

強大すぎた力を、組織はもてあまし、自らの手で排除しようと。女ミラが、告げる。

「あなた・・・死になさい。」

周囲から強大な殺気がふくれあがる。

今まで組織に背いたことがないリンが、うごいた。

ドシュツ

紅く紅く染まる指

「レンに会うまでは・・・。死ネナイ」

危険分子の中の危険分子。狂った組織でさえ、彼女を手放した。

放っておけば、特殊警察に抹殺されるだろう・・・。そう考えたのだ。

Len

計画通り。すべては、思った通り

「じゃあな。」

左手を鳴らす。

そのとたん、周りにいた人間、いや、人ではない。「悪」達の首が飛ぶ。

事前に張っておいた糸が刎ねたのだ。

彼は、その身体能力もさることながら、その情報収集能力と計画性は警察の中ではトップクラスだ。

世の中は白せんか黒あくかすべて決まってる。

「悪は・・・倒す」

それだけを信念に生きてきた・・・ふりをしていた。

(リンに会うまでは・・・死ぬわけにはいかない)

そののみをただ願う・・・。叶うことはないと知りながら・・・

R i n

銃で撃つ、殴る、蹴る、斬る。

「そんなんじや、タリナイヨ？力が、タリナイ。人数も、タリナイ。なにより、面白さがタリナイヨ？」

特殊警察が次々放たれる。凡人なら、即死。いや、危険分子でさえもかつて逃げきれた者はいない。

でも、まだタリナイ。破壊衝動は止まらない。部隊隊長のような男を倒して、戦闘は一瞬にして終わる。

「もうそろそろラスボスみたいなの来ないかなって、思ったんだけど、」

来る奴来る奴みんな弱くて、脆い、ヒト。

「私は、ナンノタメニツクラレタノ？」

呟いたとたん、今までの雑魚とは比べものにならない、殺気。銃を、構える。

L e n

最近、危険分子ガ町にいるらしい。排除せよ。

その命令が政府から下ったのはかなり前からだ。

通常は1〜3日で始末されるのだが、今回は違う。帰ってこないのだ。

一人として。

上層部も考えがあるのだろう。まだ新参者の弱い奴を次々送り、まだ生かして置いた。

一度に殲滅する気が、それとも。

(俺に殺らせる気が・・・?)

能力が通常の何倍もある彼は、数値三で「危険分子」だった。

(それを上層部は厭がっている。)

それから数時間後。

「対象を、ナンノタメニカシテオク？」

ターゲット
目標に向かって忍び寄り、抜き身の刀を・・・

R i n a n d L e n

振り下ろされた狂気かたなを、銃で撃って防ぐ。それを避ける、弾はじく。

二人の姿は、凡人ならこう表現しただろう。「まるで見えない何か
がいて、次々と壁やらなにやらが傷ついていく」と。そう、二人は
あまりに速すぎる。

「ククク・・・。」

帽子をかぶっていて顔は分からない。でも、そのケーサツはもの凄
く強かった。

楽しい。こんな楽しさは、8歳以来、始めて。

「何を嗤わらっているんだ？」

おれも・・・。楽しい。あいては、こちらの手の内が分かっ
てるかのように。

用意していた毒やら罠やら、落とし穴やらには全く引っかかって
れない。

わずかな焦りと、大きな喜び。

「これで・・・とどめだっ！」

「甘い！」

ギインと音がして、刀と銃身が交わる。そして、その風圧で帽子が
飛んで顔があらわになる。

「え・・・？」

「嘘・・・。」

かつて別れた片割れが
つたら・・・？

あまりにも、信じがたい 相手だ

リンが指名手配犯で

レンが特殊警察で

お互いを、倒さなければいけない。

「レンいいわ。私を殺して。」

「リン、いいよ。」

俺を殺して。」

涙があふれた。

互いに、再び会うことを支えに生きてきた。

その願いは叶った。

叶うはずがなかったのに。叶ってはいけなかったの
に。

(後書き)

友達にリクエストされて書きました。やっぱりボカロっていいですよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0966z/>

からくり卍ばーすと

2011年12月3日19時01分発行